

【論文】

日高六郎のコミュニケーション論 ——社会を開くとはいかなることであるのか——

A Communication Perspective on Rokuro Hidaka

片上 平二郎[†]

1. 「コミュニケーション批評」から考える日高六郎

戦後社会に深く影響を残した社会学者の一人として日高六郎の名前をあげることができるだろう。彼は単なる学術研究の枠に閉じるのではなく、戦後社会の新たな可能性を広げるべく、無数のジャーナリスティックな著述活動や講演活動も行っていた。2004年8月に作成された100ページを越える日高六郎著作目録（「参考書誌研究」61号）をめくるだけでも、彼の執筆量とその内容の多様性におどろかされることになる。

だが、改めて、日高六郎の思想とはいかなるものであったのかと考えてみると、それを具体的に取り出すことはなかなかむずかしい。たとえば、日高が一貫して「戦後社会」や「民主主義」、「市民主義」という価値観の重要性を語ってきたが、現在の視点からすれば、それらはすでにきわめて一般的に理解されている価値観であるように感じられ、日高個人の思想的固有性がどこにあるのかは見出しづらい¹⁾。政治学者である宇野重規は日高について「同時代的な影響力に比して、日高は、今日ではややその存在の輪郭が見えにくい知識人の一人」（宇野 2016: 300）として語っている。さらに、いまひとつ確認しておきたいのは、同時代においても、日高の思想の内容は明瞭にとらえがたいものとして感じられていたであろうことだ。たとえば、彼の学術的な名著（もしくは唯一の体系性を意識した書籍かもしれない）である『現代イデオロギー』も、1960年刊行時の週刊読書人（1960年12月5日）の特集記事ですでに次のように紹介されている。

日高六郎がとりくんでいる思想的営為は、おそろしく困難な、しかしそれを解決すれば豊穡な思想の生産が約束されるという野心的な、ものである。その構想を日高じしん定式的に示してないし、日高の思想が教祖的にあれこれの流派の下敷きにされるということもない。むしろ日高の思想の特質は、教祖に発する思想的潮流が形成され、思想があれこれのエコーに分流した根底で、もういちど統一的思想の営為を回復する工程をつくろうとするところにある。

ここで語られていることは、日高の思想のまとめがたさである。『現代イデオロギー』は彼の思考の統一像を呈示できる本とは言えず、「統一的思想の営為を回復する工程をつくろうとする」というもってまわった言い方で表現せざるを得ない本であった。日高六郎はそもそもが「輪郭が見えにくい」存在であったとも言えよう。

[†] 立教大学社会学部准教授 katakami@rikkyo.ac.jp

この論考では、「コミュニケーション」という観点を軸に置き、その輪郭がきわめてとらえがたい日高六郎の思想と実践について考察を行うことで、彼の複雑な言論活動のあり方の再定位を試みる。

戦時下においても「アメリカの文化人類学などをわりと読んでいた」と語る(日高 1973: 33)日高は、終戦後、さまざまなアメリカ社会学の知見を日本へと紹介し始めるようになる。そうした活動の一環として、東京大学新聞研究所助教授であった日高は、アメリカのアカデミズムの中で生まれた「マス・コミュニケーション」論、「コミュニケーション」論、そしてそれと付随して「大衆社会」論といった枠組を日本の社会学へと移植する試みを行っていた。南博、加藤秀俊、清水幾太郎といった名前と並び、日高六郎は日本の「コミュニケーション」論導入の初発世代に組み入れることが可能な存在である。

そして、日高における「コミュニケーション」という論点の重要性は、彼が社会学の中で行った「コミュニケーション論」の導入にとどまるものではない。1950年代以降、彼は学術的世界に留まらず、ジャーナリスティックな評論活動を通じて、「メディア知識人」として名を馳せる存在でもあった。彼は「マス・コミュニケーション」の時代の只中にある戦後日本社会の中で、新たな学術的な「コミュニケーション」のあり方を模索した知識人でもあった。その「マス・コミュニケーション」的足場があるがゆえに、彼は自身の立場と学生たちの運動との間にあった矛盾を断ち切るべく、1969年に東大教授を辞職し、著述家としての道を歩む選択をすることも可能になったことだろう。

鶴見俊輔は論文「ルソーのコミュニケーション論」の中で「コミュニケーション・クリティック」という視点を提起している。「コミュニケーション・クリティック」とは「コミュニケーション史上の過渡期にあって、その時のコミュニケーションのとりべき道筋をあたらしく設計して示す人々」(鶴見 1975: 393)のことである。鶴見はルソーという思想家の「コミュニケーション・クリティック」としてのあり方を考えるために、まずルソーが思想的に呈示した「コミュニケーション論」それ自体を把握し、続き、その見解に基づきルソーが行った「当時のコミュニケーションに向けた批判」を考え、最後にルソー自身が行った新たな「コミュニケーション活動」に分析を行っている(鶴見1975: 396)。この鶴見の分析法には、ルソーの思想を、時代から隔絶した自律的なものとしてとらえるのではなく、ルソーが生きていた時代のコミュニケーション史的文脈との関係の中で実践的なものとして考察しようとする「コミュニケーション批評」的視点が存在している。本論文では、日高と同時代的な盟友関係にあった鶴見のこのような「コミュニケーション論」的視座を意識しながら、日高六郎という知識人の思想の輪郭を現在の中で描き出したい。

2. 「開く」ことに向けられた思想

学問的越境やジャーナリズムへの接近、実践的な社会運動へのコミットメントなど、さまざまな活動へと「開かれた」知識人として日高はその名を馳せていたが、彼の思考の根底にはその最初期からベルクソン経由の「開く魂」(日高 1960a: 453)という問題関心が存在していた。「開かれる」ということは既存の「閉じた」回路とは別の世界に向けて、「コミュニケーション」を拡大していくことを意味する。「コミュニケーション・クリティック」として日高をとらえるにあたり、まずはこの「開く」ことへと向けた彼の思想的関心を追っていかう。

戦時下の1944年、日高は最初期の論文として「集団の封鎖性と開放性について」(日高 1944)というベルクソン論を書いている。この論文はベルクソンの思想を論じることによって、「閉じたゲマインシャフト」が近代

になるにしたがって「開かれたゲゼルシャフト」に向かっていくという発展段階的な近代性の把握を批判的に書き換えることを目的としている。どのような集団であれ、その中には、開かれていくベクトルと閉じていくベクトルの2つの方向性が存在している。他の国家に向かって開かれていく商行為は、独占資本主義という形態に閉じていく側面がある。逆に言えば、身内の領域に閉じていくような情緒的な感情の中にも、他者への情愛へと開かれていく可能性がある。

「開く」機能と「閉じる」機能は単純に、ある社会の形態や歴史的段階に対応するかたちで存在するものではなく、双方はともにどこにでもありえるものだ²⁾。この論文の主張は表面的には「共同体」^{ゲマインシャフト}が持つ可能性を肯定的に論じているという意味で戦下の時局迎合性を読み取ることもできるが、他方では「閉鎖的」な社会を批判するという意味ではきわめて危険なものとして読むこともできる。あくまで抽象的な「社会学理論」についての論文として書かれながらも、同時にこの論文はきわどい「社会批評」としての役割を持つものでもあった。

戦時下において日高は、どうしてもなく「閉じて」しまっているファシズム的な社会情勢の下で、社会が「開かれる」可能性を模索すべく、思索を続けていた。そこに込められたものは、言論が不自由な社会における「コミュニケーション」への熱望のようなものであろう。その意味でこの時点ですでに日高は潜在的な「コミュニケーション・クリティック」であったと言える。

戦争終結直後の1946年にはこの問題関心をさらに展開した論文「ベルグソンとデモクラシーの心理学」(日高 1960a: 448)が発表されている。この論文では「知性」と「感情」の中での、「開く」と「閉じる」こととの関係が論じられる。先の「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」に関する構図と同様に、「感情」は狭い範囲に「閉じた」ものであり、「知性」はより広い世界に「開かれた」ものであると理解されやすい。だが、「知性」や「論理」がおのれのみが「正しい」などとうぬぼれてしまえば、そこでは狭い知性の範囲への「閉じた」世界が展開されてしまう。そこで日高は、開いた魂、人類全体に向けた同胞愛などといった論点から、マルクス主義を中心とした「デモクラシーの論理学」に欠けている「情緒」的なものの「開かれた」可能性を指摘する。

マルクス主義は図式化された発達段階的な史観に基づき、現在を分析しようとするが、その中では「現在のこの混沌は、未来完了形として与えられている」(日高 2011: 286)にすぎないものとして扱われてしまう。そのような世界観は理性的なかたちで社会のパラドックスを指摘したり、もしくは社会に対するシニカルな距離感の獲得に結びついたりするところがあるが、それらの要素は思想として「時代を正面から支えるものではない」(日高 2011: 289)。つまり、そこにある「論理」や「正しさ」だけでは、社会の新たな「開かれた」可能性をとらえることはできない。「歴史の必然性という絶対の物差しからこぼれおちる部分が人間のなかにはある」(日高 1980: 62)と日高は考える。「知性以上の感情」が持つ意味をベルクソンを通じて考える試みも、このこぼれおちる側面をとらえるための作業であっただろう。

「知性」は時として、自己完結的な図式の中に「閉じて」しまい、他者をその図式の中で単なる駒の如くイメージしてしまい、外部との「コミュニケーション」を遮断するものとなっていく。新たに到来した戦後社会において、おのれの「正しさ」に固執するアカデミズム、特に先鋭化したマルクス主義者たちに対して、日高はその鋭利な「論理性」の危うさを指摘する。そのような作業はマルクス主義を思春期に学んでいた自身に対する自己批判的意味をもつものでもあったはずだ。日高は「論理」や「理知」の意味を強く感じながらも、同時に、その外側にある「心情」の意味も強調する。戦後社会において、学問は、その外部と「コミュニケーション」を行うためには、

「正しさ」と「やさしさ」の双方をそれぞれ養う必要がある。そのためには「心情と論理をつなぐ想像力」(日高1995: 115)が模索されなければならない。

終戦直後、日高は社会学、そしてさらには学問の世界の中に「閉じる」ことなく、『近代文学』誌周辺の文芸同人グループとの交流を続けたが、そこにはデュアメルが言うところの「全体的人間」への関心があった(日高1960a: 584)。人間の「心情」をつかむために文学的な視点は重要な意味を持つ。ヴェーバーの責任倫理と心情倫理の融合を考えると、政治的なものと文学的なものの関係を考えること、理論信仰と実感信仰の関係を考えること、このようなさまざまな思索は、学問の世界における「論理」と「心情」の関係を新たに打ち立てるために行われたものである。たしかに、戦前、戦中のファシズム的な支配体制は表面的には終焉を迎えた。だが、戦後社会の行く末がどのようなものになるかはいまだわからない。だからこそ、戦後社会に即したかたちでの「開かれる」ための思想を日高は展開しようとする。

3. 日本における「コミュニケーション」の社会学の誕生

日本で「コミュニケーション」というモチーフが本格的に社会学の世界で取り上げられるようになるのは終戦後のことである³⁾。1945年のユネスコ憲章の第1条にこの言葉が用いられ世界的に一般化されたこの概念は、1950年前後に井ロー一郎の H.D.ラスウェルの紹介や南博の『社会心理学』(1949)によって日本の学術世界に広がり始め、社会学の世界でも1951年に清水幾太郎が『社会心理学』の中で議論を展開するとともに、同年には『社会学評論』で特集が組まれることになる。日高六郎も福武直との共著『社会学 社会と文化の基礎理論』(1952)において、「文化の諸相」の一項目として「マス・コミュニケーション」についてすでに論じている。日高は清水とともに日本の社会学の中に「コミュニケーション」論の文脈の移植を推し進めた代表的論者の一人であるだろう。

日高によれば、「コミュニケーション活動」とは「人間が人間として生存し、社会が社会として成立するために必要な、最も基本的な活動のひとつ」である(日高1967: 1)。人間は生存のために自然との関係、および他の人間との関係を必要とするが、前者を基礎付けるものが「労働・生産」であり、後者を支えるものが「コミュニケーション」である。「労働・生産」と「コミュニケーション」は強く結びついたものではあるが、「狭義の労働・生産の過程から相対的に独立した独自のコミュニケーション活動の領域が存在」してもいる。「遊戯としてのコミュニケーション」の存在にもわかるように、「余暇活動は、そのほとんどがコミュニケーション過程である」(日高1967: 1)。これまで「労働・生産」を中心に社会をとらえてきた社会学も、戦後の“新たな”社会においては、積極的に「コミュニケーション」を視野に入れ、「開かれ」ていく必要がある。

清水幾太郎は「マス・コミュニケーション研究の道具である諸観念が深くアメリカ社会の特質によって規定されている」と語っている。電話なりラジオなり映画なりテレビなり、「マス・コミュニケーションという事実が特殊な発達を遂げているのアメリカであり」、だからこそ、世界的に「その研究に先鞭をつけたのがアメリカ」(清水1955: 1)であることはおどろくべきことではない。マルクス主義は「労働・生産」という観点を軸に置き社会の総体を理解しようとしたが、それに対して、「民主主義」的な国であるアメリカの社会学は人々の「コミュニケーション」を軸に置き社会を理解しようとする。敗戦を経て「民主」化の方向へと向かう戦後日本もまた、この「コミュニケーション」論的な枠組を導入し、「開かれ」ていく必要がある。

日高は、戦後社会は仏教伝来、キリシタン来訪、明治期に次ぐ日本の四番目の「開国」によって成立したものであると語っている(黒川 2012: 78)。その「開かれ」の1つの「理想型＝理念型」はアメリカ的な「民主主義」によってイメージされるものである。アメリカの学問的風土は、「社会」からの拘束の薄き「自然的な存在としての人間」(日高・加藤 1962: 5)を前提とした「十八世紀風の素朴な自然法的民主主義のなかにあらわれている『人間性』に対するゆるがぬ信頼」(日高 1955a: 315)に基づくものであり、そこにはある種のオプティミズムが存在する。「母国の絆を切って、自由人として北米大陸にやってきた」「構成員の雑多な国」(日高・加藤 1962: 4)だからこそ成立する人間観があり、それに由来するデモクラシーが存在する。アメリカ社会学の“素朴な”「個人」観、およびその「個人」を前提とした「コミュニケーション」観は、「民主主義」の“明るさ”を反映したものであり、そこには一つの思想がある。戦後日本における「コミュニケーション」の受容とは、より広く、この“明るい”思想を受け入れることを意味していた。

だが同時に日高は「マス・コミュニケーション」がある社会の中で大きな影響力を持つことに対する危惧を表明している。「マス・コミュニケーション」という「巨大なもの」は、「それを作り出した」人間を逆に「支配しようとする」ものにもなっている(日高 1955b: 7)。これは例えば日本に原子爆弾を落とすことになった原子力と同じように「人間疎外」を生み出すものである。よって「マス・コミュニケーション」に対峙する研究者は「期待と危惧の二つの感情にとらえられ」ざるをえない(日高 1955b: 7)。「諸外国でも、また日本でもごく最近」ようやく研究がはじめられた「コミュニケーション」研究においては、「負わされた課題の大きさにくらべて、研究の成果も組織も驚くほど貧しい」状況に、いまだある(日高 1955b: 8)。そのため、日本においても「コミュニケーション」論は単にアメリカの理論を輸入するに留まらず、従来の図式を改良していく必要を有するものでもある。

その中で指摘されるのは、アメリカの「コミュニケーション」論が社会心理学的な研究に偏っているということだ。「マス・コミュニケーション過程の社会心理的なメカニズム」という「ヨコ系」だけではなく、「マス・コミュニケーション成立と発展の歴史的な政治的背景」という「タテ系」がかたく結びあわされることによってようやく、「マス・コミュニケーション研究は生産的なものとなる」(日高 1955b: 8)。なぜなら「コミュニケーションが行われる場は、つねに具体的な社会関係のなかであり、またその社会関係はさらに特殊な歴史的・現実的状况によって規定されている」(日高 1967: 9)からである。歴史的視点が希薄なアメリカ社会学は、このタテ系にあたるイデオロギーへの着目やコミュニケーションの歴史的社会的条件への着目が薄いという弱みを持っている。

そこで日高は、社会心理学的な「コミュニケーション」論に歴史的社会的条件への視点を加えるべく、マルクスの『資本論』における「生産の総過程」の分析のイメージを借りた「コミュニケーション総過程の理論」という構想を提示する(日高 1967: 2)。この構想はあくまで「コミュニケーション学者の夢あるいは野心」(日高 1967: 2)に留まるものであるかもしれないが、このような視点の中に、単なるアメリカ社会学の輸入に留まらない、日本社会学における独自の理論を構築しようとする日高のスタンスをここに見ることもできるであろう。

そして、このような「コミュニケーション」の総体的把握に向けた視座から、「パーソナル・コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」という二分法に対する疑問が呈示されることになる。両者の関係をグラデーション状にとらえることで、その「中間的段階のコミュニケーション形態」に着目することの意義も語られる(日高 1967: 7)。このような指摘は理論というレベルから見れば軽い揚げ足取りのようなものに見えるかもしれないが、後述するように日高がさまざまな文化活動や政治活動にコミットしながら社会の分析を続けていたことを

考えれば、「中間的コミュニケーション」の重視が戦後日本における社会学の展開において必然性を持つものであることがわかるだろう。このように日高は戦後日本社会と戦後日本社会学を「開いていく」ために「コミュニケーション」論を導入しつつも、同時にそのアメリカ由来の「コミュニケーション」論を日本社会と日本社会学の中でさらに「開いて」いく態度を見せていた。

4. 「つなぐ」ためのコミュニケーション実践

「コミュニケーション・クリティック」としての日高の姿は、彼が単に「コミュニケーション」に対する学術的研究を展開していったことに留まるわけではない。むしろ、戦後社会における日高の存在感は、彼が学者や学会という枠組みの中での学術的「コミュニケーション」の枠を越えて、「マスコミ」などの力も借りながら社会それ自体との「コミュニケーション」を行ったことによって生み出されたものである。1950年代、日高は精力的な学術活動が続けながらも、同時に、ジャーナリスティックな文章の執筆や市民運動への関与、社会科教科書の執筆をきっかけとした教育界との交流など、多面的な活動を開始する。このような社会的な活動こそが「コミュニケーション批評」に基づき、日高が知識人として必要なものであると考えたことであったのだ。“新たな”戦後社会の中では、これまでの「閉じた」学問的態度は通用するものではなく、新たな「コミュニケーション」の回路が模索される必要がある。日高は社会学的な「コミュニケーション研究」を押し進めるとともに、数々の具体的な「コミュニケーション実践」としての社会的活動を展開している。そこに見られるのは、異なる立場にある人々を「つなぐ」ことに向けた日高の強い意思である。

日高の学術スタイル自体がそもそも、多くの部分で「コミュニケーション」的要素を多く含んだものであった。先に見た日高の著作目録の末尾に作成者である平川千宏によって、次のようなコメントが書かれている。

日高六郎氏の文章は大変多い。しかし、例外的といっていいくらいに著作集もまだ刊行されておらず、単独での著書も10冊に満たない。かわりに共著書、編書・共編書が多数にのぼる。このことは、氏が、自身一己のことよりも、いかに多くの人たちとの連帯、共同のしごとに力をそそいできたかを示していると思う。(平川2004: 107)

このコメントにあるように、戦後の日高の仕事は、共著書のかたちで編者という立場をとること、そして座談会的な記事においてまとめ役や司会役という立場をとることがきわめて多い⁴⁾。さらにその共同作業の相手は社会学者だけでなく、文芸評論家や政治学者など諸学の研究者たちでもあった。ここに日高の教え子であった谷川雁が日高のことを「整理王」と名付けた(谷川 1963: 161)ような資質を見ることもできるだろうが、同時に、自分自身の主張を強く押し出すよりも、多様な視点を「つなぐ」ことに力点を置く日高のスタイルを見ることは注目されて良い。多元主義的な言論空間を生み出すことに向けて日高は尽力していた。「個人」としての単著者であることよりも、無数の人々の協働によって学問は行われるものであり、その「媒介者」であることを日高は目指していたとも言える。ここに他者へと「開かれ」、「コミュニケーション」を展開することに対する日高の強いこだわりを確認できよう。

そして、そのような「コミュニケーション」的スタイルの中に日高の強い共感能力を見ることもできる。鶴見俊

輔は日高六郎について、くりかえし「(笑)」をつけながら「お人よしなんだ」(鶴見・上野・小熊 2004: 366-370)と語っているが、これもまた、議論の中で他者の意見に引き寄せられ、それに巻き込まれていく日高の体質を表現したものであるだろう⁵⁾。日高を「多元主義的なデモクラット」(作田 1967: 251)とする作田啓一は、「媒介者にまず要求されるものは、共感ないしは同一化の能力である」(作田 1967: 242)としている。鶴見俊輔をはじめとする「思想の科学」グループの交流などを通じて、日高の文体もまたやわらかな感触をもったものへとひきずられ、変化していく。日高は自身の学術スタイル自体を、新たな「コミュニケーション」の回路の中で変化させていく。

そして、日高が学術的「コミュニケーション」を行った相手は狭義の知識人だけではない。日高は日本において、インテリゲンツァたちの思想は外国思想の輸入に代表される、社会の現実とは噛み合わない観念体系を形成しやすく、それだけに「さきばしりのイデオロギー」(福武・日高 1952: 229)となってしまうがちなことを指摘している。そうした意識の中で、1951年に刊行された山村の中学生たちの生活記録文集『山びこ学校』に、その大仰な衝撃の受け方自体に「すでにわれわれインテリゲンチアの特異な位置が暴露されているような気が」するとしながらも、日高は「何か足もとをすくわれてしまった感じ、つまりいままで自分が考えたり、勉強したりしてきたことの意味が、一度にさらわれてしまったような感じ」を受け、「思想は民衆から生命を得る」と考えるようになったと語る(日高 1953: 112)。その後、日高は民衆によるサークル運動や生活記録運動に具体的に接近し、自身の問題関心を「開いて」いくこととなる。その根源にあるものは市井の人々の「コミュニケーション」のあり方の再発見である。新たな思想を求める日高は、「思想の科学研究会、『近代文学』、サークル・生活記録運動、教科書問題、日教組教研集会、教科書裁判、国民文化会議、原水禁運動、安保闘争、ベトナム反戦運動(脱走米兵救助活動など)、日韓・在日朝鮮人問題、沖縄問題、被差別部落問題・狭山事件裁判、市民・住民運動(『市民』の編集・発行など)、水俣病問題と支援活動など」(北河2018: 135)多岐にわたる活動や運動に取り組んでいく。

多様な論点や視点があると、つい人はそれを1つのものにまとめてしまいたくなる。「開かれた」多様性に真の意味で向き合うことには相当な粘り強さが要求される。大衆と知識人の関係について語る「大衆論の周辺」では、知識人の立場に居直るのではなく、それとは反対に大衆の側に足場を確保するのではなく、両者に「はさまれて」しまうことの中に自分が採るべき「第三の論理」の方向性を日高は見出している。そのような道はコツコツとその中で「考えていく」という「農本主義的はたらきもの」というかたちをとるものなのである(日高 1960a: 522-523)。宮下祥子は、教育運動における日高の活動の中での、『うんざり』することがありながらも、倦むことなく状況に学び、教師に対する問題提起を続けた……「忍耐力」を強調している(宮下 2020: 162)。「閉じた」戦前社会を「開かれ」たものにするための日高の知識人としての「コミュニケーション」の足場は、多様な立場に地道に向かい合うことの中にあった。彼は戦後社会の「コミュニケーション実践」として多様な立場を「つなぎ」、そこから社会の変革を志していた。

このように、戦後日本において日高が強く表に出した相貌はオプティミズムに基づく多元主義者というものであった。「新たに」出航することになった戦後社会を「明るい」ものとすべく、彼は「粘り強く」多様性に「開かれていく」ための「コミュニケーション」の土台をこのようにしてつくりあげようとした。その「コミュニケーション」は戦後社会に新たに現れた「マス・コミュニケーション」状況を利用した「軽薄さ」紙一重の膨大な「メディア知識

人」的な言論活動に依って立つ部分もある。そのようなスタンスはときに、尾高邦雄による「日高君は思いつきと構想力の天才である。それなのに、まだ自分の仕事らしい仕事を発表していない。……思いつきのよさはとにかくジャーナリズムから重宝がられる。それだけに、社会学プロパーからやや遠ざかったところで仕事をしている彼に、わたくしはもう一度社会学に帰れ、と呼びかけたいのだ」という苦言(尾高 1958: 16-17)に結びつくような側面を持つものであったかもしれない。だが、日高は戦後という時代においては、これまでの学術的な「閉じた」世界とも、また、画一化された巨大「マス・コミュニケーション」が生み出す大衆社会とも、別の「中間的コミュニケーション」の回路を求めて、自らの言論実践を積極的に行っていった。

5. 日高六郎の時代、および、その後

中筋直哉は「日高独自の構想」として、「知識人批判から社会心理学を経て市民社会論に至る」という道筋を語っている(中筋 2003: 47)が、たしかに、理論、分析、実践の三つの要素が絡み合いながら、それぞれの要素が互いに磨きあげられていく感触が戦後初頭の時期の日高の仕事の中にはある。1959年に語られた「農本主義的なはたらきもの」という日高の自己像は、この時期の精力的な活動を見れば、非常に良く当てはまるものであるように感じられる。一人の知識人として日高は多様な「コミュニケーション実践」を行い、彼の学術研究と社会状況を「粘り強く」結びつけていこうとする。

理論、分析、実践を結びつけていく日高の知識人としての「コミュニケーション実践」が一つのピークに達するのは『現代イデオロギー』が刊行された1960年であるだろう。この年は彼が強くコミットした市民運動もまた、新安保条約に対する反対運動および強行採決への抗議運動というかたちで大きな盛り上がりを迎えた時期である。日高は1960年に主著といえる著書を発表し学術面で存在感を示しながら、また同時に、市民運動への参加を通じて行動する知識人として社会的な存在感も示した。「コミュニケーション批評家」として日高をとらえることによって、彼が同時代で為していたことの輪郭線はかなりの部分、見えやすいものとなってくるだろう。多様な立場を「つながり」、新たな社会が「開かれる」高揚感を彼の数々の仕事の中に見ることができる。

しかし、日高の仕事を通時的に追っていくと、1950年代後半くらいから、彼の日本社会への分析の中にどこかペシミスティックな感触が混入してくることも確認できる。この時期においてはしばしば、「マス・コミュニケーションの力の増大」(日高 2011: 231)が現れるような「<機械時代>に対応する社会形態としての<大衆社会>」において、『政治的無関心』や、政治の『興業化』……や『情緒化』(日高 2011: 219)が進行するという図式が提示されている。市民社会による新たな「コミュニケーション実践」の希望と可能性を語ることも、また「マス・コミュニケーション」による「大衆社会」化状況への危惧の方を日高は強調するようになっていく。

そしてその時代の変化は、「戦争体験」を持たない「若い世代」の出現との関連づけられて論じられる(日高 1960a: 376)。市民運動の可能性を大きく論じながらも、日高の社会分析は徐々に時代意識の中両義性への指摘を強く押し出し始める。さらに1950年代後半の段階ではまだ両義性を保っていた戦後社会への評価は60年代に至っては、さらに否定的な側面が強まっていくことになる。日高が積極的にコミットした「国民文化会議」の64年の運動方針として書かれた「今日における文化状況と今後の課題」では、「ムラ意識とマス意識とが絡まっている」社会状況の中での「政治的無関心」が強く問題化されており(日高 1973: 187)、また若年層の「私生活中心主義」が批判されている(日高 1973: 184)。「戦後社会」は豊かさに「開かれた」ように見え

ながらも、実際には「閉じた」社会となってしまうと日高において認識される。

日本は「経済の領域で『大成功をおさめた』」(日高 1980: 15)が、それは結果として、保守と革新がともに「快適の哲学において、意見が一致しているように見える」(日高 1980: 19)状況を生み出した。人々は「<私生活優先>の生活態度を」身につけ、特に若者の間では「自由」は単なる好きなものが買える『経済的自由』として理解されるようになっていく(日高 1980:93)。たしかに人々の価値観は「滅私奉公」から解放されたが、結局、それは「滅公奉私」に変貌しただけであり(日高 1980: 81)、「価値観の多様化」がうたわれながらも、それは消費対象の選択可能性の増大に過ぎない(日高 1980: 83)。そして「若者たちのあいだに『やさしさ』がブームのように広がっている」が、それは「まったく政治の世界などとは無関係の『やさしさ』」になってしまっている(日高 1980: 141)。

日高は80年代という時代をジョージ・オーウェルの『1984年』と絡めて、「管理社会化」の流れで理解しようとしており(日高 1980: 93)、その先では日本社会の「第二の八・一五へ向かっての緩慢な歩み」が進行していると考え(日高 1980: 23)。ここにあるのはきわめてペシミスティックな戦後日本社会像である。このように日高の相貌はオプティミストからペシミストへと反転していった。それは彼が理論的に対峙しようとしていた巨大化した「マス・コミュニケーション」による「自己疎外」が本格的に到来した状況とも言えるだろう。戦後の人々のライフスタイルと「コミュニケーション」スタイルは、保守的で現状肯定的な形態をとるものへと移行していった。

このような時代状況との乖離の中で、日高は1969年に東大教授を辞職し、1973年には一旦、日本を離れパリへと向かうことになる。彼は社会学の教員というこれまで自らが立ってきた足場をまず離れ、その後に戦後日本という足場から地理的にも離脱していく。戦後という時代意識を社会に展開し、定着させるべく、日高六郎は知識人として理論研究、社会分析、運動実践といった領域を「つなぐ」ことを自身の身をもって尽力してきたが、その結び目は時代の変化の中で少しずつほどかれていった。日高六郎と社会状況の間の共鳴は徐々に弱まっていく。

6. コミュニケーション論のメタ・クリティーク

日高六郎が展開しようとした社会学とは、まず戦後を生きる人々の「心情」を描きながら、その中にある“新しい”可能性をすくい上げ、それを「つなぐ」ことによって、戦後日本という新たな社会として現実化するという「希望」によって支えられたものであった。作田啓一の言葉を借りれば、日高社会学の構想は「閉ざされた生活の底を突き抜けることによって、普遍的なものへと向かう道が開けてくるという逆接」の中にあり、「個別者と普遍者とをダイナミックに関連させる方法論」(作田 1967: 236)によって成り立つものであった。この「開かれた」通路に向け人々を「つなぐ」ものこそが、日高が研究の対象とし、また実践の課題とした「コミュニケーション」であった。しかし、「戦後社会」の“なりゆき”はそのような日高の「希望」とは別の方向性へと進んでいくことになる。そして、日高の思考の基調を成すものはオプティミズムから、それとは正反対のペシミズムへと反転を示していく。

このような日高の思考の反転を、「日高社会学」に内在する理論的な立場の失敗と見る立場もありえるだろう。本章では日高の態度の変化を、彼の「コミュニケーション論」の陥った隘路としてとらえることを試みたい。

彼は自らの「コミュニケーション批評」に由来する見解に基づき、新たな「コミュニケーション実践」を行った。しかし、そのような「コミュニケーション批評家」としての日高六郎を後の時代から振り返り、その理論的内実を「コミュニケーション論のメタ・クリティーク」の対象とする態度も必要であるはずだ。本論文ではこれ以降、日高六郎の「コミュニケーション論」を、現在の視点からの「コミュニケーション批評」の対象として扱ってみたい。

日高は戦後社会に芽生えた「開かれた多様性」というある1つの“新たな”社会意識の可能性が、“戦後社会の全域”へと広がることを想定していた。そして、この“ある1つの可能性”を“社会全域”と結びつけるための新たな「コミュニケーション」のあり方を実践的に模索していた。「コミュニケーション批評家」としての日高が目指していたものはそのような地点である。だが、日高のそのような「コミュニケーション実践」に基づいた戦後社会構想は時代の“なりゆき”の中で頓挫してしまう。

この“1つの可能性”を“社会全域”と「つなぐ」回路として、日高は何を想定していたのだろうか。たしかにさまざまな人々は水平的に「つながって」いった。しかし、そのことは“社会全域”と“多数の人々の思い”が垂直的に「つながる」ことを意味していない。水平的な接続は、いかにして“社会全域”との垂直的な結びつきを可能にするのか。そのような問題に対して、結局、日高の「コミュニケーション論」には理論的な空白が存在しており、その空白を「希望」というオプティミズムが埋めていたという見方もありえるだろう。もしそうであるとすれば、「社会の気分」との共振が立ち消えてしまえば、その空白が埋めるものが一気になくなってしまい、オプティミズムは正反対の場所のペシミズムへとなだれ落ちてしまうということが起こり得る。

中筋直哉は論文「社会運動の戦後的位相」において、日高・福武の共著のテキスト『社会学』の日高と福武の間の微妙な執筆態度の差を問題化している。中筋は、日高がテキストの前半部で「個人」の「自由の擁護」を語っているにもかかわらず、「その先の変動・運動の問題については福武に下駄を預けてしまった」と分析する。そして、テキストの後半で示される福武の集団と統制に関する議論が、日高の書く方向性とはすでに分裂していることと中筋は指摘する(中筋 2003: 48)。つまり、この本の中で「個人の自由」と新たな「社会の構想」を結びつける具体的な回路は、日高と福武の間にある執筆者間の微妙な理論的差異の中で放置されたものになってしまっている。このような中筋の議論は、日高の「コミュニケーション」論の理論的な空白を指摘するものとして読むことができる。

もしくは、同時代において数少なかった「日高六郎論」を書いた作田啓一の議論もまた、日高の「コミュニケーション論」の不足を指摘するものとして読むことができるかもしれない。作田はさまざまな意見を「つなぐ」媒介者としての日高を高く評価する。作田は日高の思想の中に、個別の意見を並列させることで普遍に至る「それはよくわかる、だがしかし……」という弁証法的な「媒介」の論理の存在を見出す(作田 1967: 242)。「つなぐ」という「コミュニケーション」の実践者としての日高の姿がここにある。この日高論の中で作田は、1950年代半ばまでの日高の議論を第一期と規定し、そこでは「それはよくわかる」という前者の側面が勝ってしまう傾向が存在することを指摘している。「第一期」の日高は「つなぐ」ことは行う。だが、それらを「つないだ」後、それらを新たな思想へと「変化させていく」ような弁証法的な性格が日高の議論では希薄であるということを作田は指摘している。中筋が指摘する日高の「コミュニケーション論」の空白は、作田の場合、「媒介の論理」の弱さとして論じられている。

この一九六五年に書かれた論考において作田は、後者の「だがしかし」という論理へと力点を移行していく

「第二期」の日高の姿を拾い集め、新たな展開を期待するかたちで文章を閉じている。真の「媒介」の論理はこの「だが、しかし」の側にあるはずだからだ。だが、この作田による弁証法的な「第二期への期待」は実現したとは言いがたい。たしかに、60年代以降、日高は「だがしかし」の論理を語っていた部分はある。しかしそれは新たな社会の「希望」に満ちた可能性への「媒介」の論理というよりも、「絶望」的な戦後日本社会の隘路を語り出す契機として現れてしまっている。60年代以降の日高において、「だが、しかし」の論理とは、「コミュニケーション」の「媒介」というよりも、「コミュニケーション」の隘路に通じる部分が大きい。戦後という時代の“熱さ”の中で展開された日高の「コミュニケーション論」、および「コミュニケーション実践」はその時代の潮流を受けて成り立っていたものであり、その前提が弱まった場合、理論的空白を見出さざるを得ないものでもある。

7. 谷川雁とコミュニケーションの毒

日高の「コミュニケーション論」的な欠点について同時代的に指摘した論者の一人に、戦中には日高の東大での教え子であり、それ以降も師弟関係を越えた“独特な”親交関係を日高と結び続けていた谷川雁を数えることもできよう。1950年後半から炭鉱労働者とともに活動を開始し、「工作者」という独自の概念をつくりあげた谷川雁もまた、サークル運動という“新たな”「コミュニケーション」回路を模索していた人物である。

谷川は1959年の段階ですでに、日高に対して「あなたの意見もやっぱり『結んで開いて……手を打って』いううちに、組んずほぐれつのなかからルールを見いだし、『総体的イデオロギー』と『部分的イデオロギー』が見事なおにぎりのようなスタイルを形成するらしい」(谷川 1963: 48)という皮肉な口調によって、その隘路を指摘している⁶⁾。そして、そのような日高の議論は「伝達の可能性に関するおおよそ非現実的な楽観によって支えられている」(谷川 1963: 48)と指摘する。日高を「整理王」、鶴見俊輔を「解釈王」としながら、自らを「難解王」と称する(谷川 1963: 161)谷川の文章は、独特の文学的表現と挑発的・論争的に他者からみつような“特異な”「コミュニケーション」スタイルによって構成されたものであり、その真意を読み解くことはなかなかむずかしい。だが、独特な関係の中で語られる日高への批判は、挑発とも嫌味とも、また激励としても読めるものであり、日高の論理を違った角度から読み解くための補助線となるはずである⁷⁾。

谷川は、まず日高の立場を運動との関係における「観測者」として定義している(谷川 1963: 35)。「無限の好奇心の上に成り立つ観測の主体性」は、運動との関係の中で「半歩ふみこんだ観測者として」、「そのまま対象の内側にのめりこんでゆく衝動」に「直面する」。そこには学者と実践者の境界線が揺らぐような事態が生じている。ただ、彼ら「観察者」はあくまで「このシーソーゲーム」を気に入っている「快楽派」であり、それはなんだかんだといって「倫理のあそび」にすぎない(谷川 1963: 35)。そして、そのような立場から展開される日高の言論活動を谷川は「ジョーカーなんか持っていない」「いかさまトランプ」と呼ぶ(谷川 1963: 45)。谷川が知っている過去の日高は「カス札を乱発しながらふとジョーカーを出して逆さまに人目をくらましてきた」存在であった。ただ谷川からすれば、現在の日高は「ついにジョーカーを出さずじまい」であり、「カス札は東大助教授の名刺と化し」た(谷川 1963: 43)。つまり、多様な立場の並列や市民主義といった“空虚な”言葉を「マス・コミュニケーション」の世界で振り回しながらも、それは結局「また例の手つきで砂漠の蜃気楼をこしらえている」だけのこと(谷川 1963: 60)である。要は谷川からすれば日高の社会運動論は“一見、何かを言っているように”見せかけながら、その実、“何も言っていない”。だから、谷川は最後に「札をお出しなさい、札を」という挑

発的な言葉によって文章を閉じている。

谷川からすれば当時の日高は、他者の意見の「観察」や「整理」を行い、それらを「つなげ」ながらも、自分自身の考えを結局、表に出すことがないように見える。そして、そのような日高の当時の姿と比べるべく、戦中に学生としての彼に向かい合った、若き教師日高の印象を描き出した。そこにあるのは、“毒のある”シニカルな一面を示す日高の姿である。日高は学生である谷川を「あころのあなたときたら、いつも口のまわりにアンコをくっつけたみたい薄笑いをうかべて私をなだめたり、冷やかしたりした」存在であった(谷川 1963:43)。また、出征した自分が戦地から彼に送った手紙に対しての日高の反応について「あなたが私の形容詞をせせら笑ったときのポーカー・フェイスがいまごろなつかしいようではお互いに困るというものだ」(谷川 1963: 44)とも描き出す⁸⁾。ここにある日高の“意地悪な”相貌は、多くの人が語る“温厚”で“社交的な”日高の姿とは異なるものであるだろう⁹⁾。谷川はこのような“毒のある”日高のパーソナリティこそが、谷川と日高の「コミュニケーション」を結びつけたものであったと語る。「この年のちがった奇妙な友情(!)の原因は二人がともに救いがたい快楽派であり、少々野草の匂いのするパテン師でもあることだった」(谷川 1963: 43)。

そこから、谷川と日高の間の個人的な「コミュニケーション」にまつわるエピソードは、理論的な「コミュニケーション」の問題へと接続されることになる。日高は「現代社会」における「コミュニケーション」の問題として「マス・コミュニケーション」についての“最新鋭の”理論をアメリカから輸入した。そして、それを応用しながら、「社会」と「個人の意識」の問題、もしくは「運動」の問題を考えようとしていた。だが、そこにある社会的な「コミュニケーション」についての日高の視角は、あくまでも“透明な”「観察者」に近いものであり、谷川との“親しさ”を伴った個人的でミクロな「コミュニケーション」の中にあった“特異な”性格を見失ってしまっている。

「コミュニケーション」の成立は「人格者」であることによって遠ざかってしまうこともある。全体を見通す「観察者」の視点からすれば、個々の意見の対立やずれは許容できる、もしくは全体を活性化しうる中立的なものとして存在しているかもしれない。ただ、そんな対立やずれは、「コミュニケーション」の個々の参加者にとってみれば、耐えがたくしんどいものでありもし、また逆にどうしようもなく人を惹きつける魅力に結びつくものであったりもする。パーソナルな「コミュニケーション」には「毒」に満ちたノイズのようなものが混入してくる。「毒」こそが「コミュニケーション」の密度を強いものとするところがある。谷川は手紙というパーソナルな「コミュニケーション」手段によって、日高のそのような「個人的＝人間的」な側面に切り込もうとする。

「マス・コミュニケーション」の世界に表れる日高の相貌は“オブティミスティック”で“温厚な”社交家だ。ただ、谷川からすればそれは“意地悪な”“シニスト”である日高「個人」の魅力がかき消された姿でもある。そのような日高の「転向」は、「コミュニケーション」という問題にとって重要な“毒をもった”側面を見失わせることに結びついてしまったのかもしれない。学術の世界、およびメディアの世界にあらわれる日高が、過去に持っていた自らのシニカルな一面を薄めていたことは確かなことであるだろう。そのことにより人々を「つなぐ」媒介者としての日高が強みを持った部分もあるが、同時に媒介者である「自己」を透明化したがゆえに、「コミュニケーション」という複雑な問題を単純化してしまった部分もあるはずだ。

黒川創は日高との対話本『日高六郎 95歳のポルトレ』の末尾を「優しい人だったのは、確かだ。だが、孤独からの救助をこの人自身の側から求めたことが、かつてあっただろうか?」(黒川 2012: 221)とまとめ、日高の生涯を「孤独な人」というイメージで描き出している。日高は、自分の寂しさを人に上手く伝えることができな

いように「自分の“本心”をうまく指せない」(黒川 2012: 214)人物であった。他にも日高について、鶴見俊輔は「躊躇の人」と評し(黒川 2012: 18)、また見田宗介は「^{はにかみ}含羞」の人(見田 2018: :234)と評しているが、これら、“親しい”間柄にあった人々の日高像は、世に広まっている「コミュニケーション=社交の人」というイメージとはいささか異なったものである。旺盛な政治的な「コミットメント」の裏側にある、日高個人の「コミュニケーション」における「閉じ方」の問題は改めて考えられるべきものであるだろう。日高六郎の「^{キャラクター}性格」の問題は、どこかで隘路に陥ってしまった日高の「コミュニケーション批評」の再考察に結びつくものでもあるはずだ。

8. 記憶を「つたえる」と自己を「考える」こと

老年期に入った日高の主だった仕事は、自身の戦中期の記憶を語ることに費やされた。そこでは保守的だが反戦的な父、マルクス主義者の兄たちとともに過ごした青島の幼少期から東大の教師となる青年期が中心に語られているが、それについて日高は「僕は、ずっと家族の話をしたでしょ、あれが学問なんだ、実は」(黒川 2012: 89)と述べている。本論考では、最後に、老年期の日高による自身のこの「記憶の伝達」という実践について、一度、隘路に陥ってしまった「コミュニケーション批評」の再試行としてとらえることを行っていきたい。

日高は1980年に「体験をつたえるということ」という文章の中で、「体験を持つものが非体験について体験を持たないものに語るという関係」の「積極的な側面」について語っている(日高 1980: 28)。そこには「私が感動的だと思ったことのすべてが、学生にとって感動的であったということではない」(日高 1980: 30)のようなすれ違いもある。だが、そのような非対称な関係だからこそ、「感動が感動を呼ぶ」ような「一種の出会い」がそこにはある(日高 1980: 30)。それ以前の「歴史の教訓と理性の立場」において、すでに日高は「体験の言葉をさらにねりあげ、体験を持たない人間にも通じる言葉をつくりだす作業をつづけ、その抽象の梯子をのぼりつめると、それはついには普遍原理に凝集する」(日高 1974: 90)と論じている。

違いを持つ人間の間で何かを「つたえる」という「コミュニケーション」には、根本的な困難がある。だが、その困難があるゆえに「感動」と「出会い」が誕生する。そして、そこから「普遍」へと向かう「媒介」が生み出されもする。ここに「個人」と「普遍」の間を「つなぐ」実践という日高の問題意識を読み取ることができるし、谷川が指摘したものとはまた別の種類のものであるかもしれないが、日高による「コミュニケーション」についての新たな思索を見出すこともできるだろう。

日高は「敗戦直後」は、「体験に根をおろす価値と、原理から出る価値との結婚」が「かなりうまくいった瞬間であった」と語っている(日高 1974: 90)。その結び目になったのは「<平和>という価値」(日高 1974: 91)であった。戦中の“暗い”経験をした者たちにとっては「平和」という「理想」はとても貴重なものであった。だからこそ、その社会的に分ち持たれた「共通の理想」は、多様な立場の人々の「コミュニケーション」を「つなぐ」媒体として強く機能するものであった。そんな時代状況の中で、日高は多様な立場を「つなぐ」という「コミュニケーション実践」を「粘り強く」行い続けた。

だが、経済発展という「夢」の時代が経験され、「平和」があたかも自明なものに感じられてしまえば、その“貴重な”理想は“凡庸な”現実として認識されてしまう。時にそれは非現実的な「虚構」としてさえ感じられてしまうことになるだろう¹⁰⁾。「平和」という価値が希求される基盤となる戦争体験の“重さ”は、日高が戦後社会へのオプティミズムを確保するための重要な共鳴板の役割を果たしていた。だが、この「体験」が徐々に「軽

い”ものとして感じられるに従い、日高の思想と戦後社会の共振はうまくいかなくなってしまった。そうした中で、日高は自らの「体験」を、それをほとんど知らない若者たちの共有可能なものにまで深めることによって、歴史へのコミットメントを導こうとする。それはシニカルなものになり「閉じて」しまった戦後社会を再び、「新たな」可能性に「開かれた」ものへと転換していこうとする試みでもある。その意味を考えるために、日高の戦中体験の内実を確認していこう。

日高が大学を辞めた1971年に「戦中の体験」を語った「わが思索わが風土」という文章がある。そこで日高は自身の戦中の在り様の大部分を『政治』ぎらい」(日高 2011:21)という言葉を用いて表現している。たとえば「植民者」の息子として青島で過ごした中学時代の「快適な——あるいは快適らしい生活を、自発的に放棄するほどに強力な倫理的動機は、めったに存在することがない」(日高 2011: 17)日々が語られ、自身の学生時分については、戦争に関する思想と現実のギャップで「用心する態度を身につけた」というという表現が用いられる。そんな日高は、「戦争中は、ほぼ沈黙組であった」(日高 2011: 22)とも語る。50年の「私たちに問いかけるもの」の中では「ただ時々ノートのなかに、戦争に対するあらゆる懐疑を書きつづりながら、やっと自己を解放していた」という。それは「恐ろしいほど弱々しい抵抗であったけれども、しかしともかく私としては一杯であった」(日高 2011: 12)。そんな中で「危険思想」的な要素を持つベルクソン論「集団の封鎖性と開放性について」を書くこともあったが、それは相当に注意深く読まなければその意図をつかむことができない文章でもあり、その意味では「観察者」的立場からの「倫理のあそび」のような側面を持つものであるかもしれない。日高は戦中において「知識をもつものの多くには、勇気が欠けていた」(日高 2011: 23)と記す。多くの知識人はそうした時局の中で、せいぜいが“良心”と“身の安全”を両立できる立場を探し求める。それが“賢い”選択肢であったと言えるだろう。そんな時代に「青年期」の日高もまた、「政治ぎらい」というある種の「シニカル」な「閉じた」性向を身につけていくようになる。

日高は1944年に陸軍に招集され、長崎県大村の連帯に入るが、肺炎を起こして四ヶ月で除隊する(黒川 2012: 223)。その後、東京帝国大学で副手に採用され、1944年海軍技術研究所の嘱託となった。そこで当初、日高は「国民の戦意高揚の方策」などのテーマを与えられていた(日高 2011: 18)が、「危険思想である」「私の本音」をそこで発表することに躊躇い続けていた(日高 2005:147)。技研の中ではインテリたちが「悲観」と「楽観」と「シニカルさ」の間をグルグルと回り続けている¹¹⁾。「横行闊歩してゐるのは、いづれもオプティミズムとペシミズムとの装ひをつけた、怠惰な精神の部隊だけである」(日高 2011: 13)。1945年6月の日記に日高はこう書き記していたという。

悲観的な見通しが急激に圧倒的になりつつある。しかし何という弱々しい声。……誰かが楽観的な材料を提供すると、彼らは内心安堵のため息をつく。しかし大急ぎでシニカルなインテリ風の悲観説をひけらかす。

なぜはっきり断言しないのであるのか。しかも勇気と希望を持って。われわれは敗けるであろう、と。すでに一年前にここに書き記した臆病が、いまやその最高潮に達しようとしている。(日高 2005: 222)

この直後の7月、日高は「戦後の民主主義改革の先どり」をしたような内容の「国策転換に関する所見」とい

う文書を技研に提出する(日高 2011: 19)。それは「実行できる主体があるはずがなく、実行するに手おくれであり、持ち出すには場所をまちがえている……非政治的な政治的主張だった」(日高 2011: 20)。そして、このような主張を明白に表に出す態度は自身の身を危険にさらす可能性すらある¹²⁾。それは「絶望的かつ滑稽な悪あがきをした」(日高 2011: 21)だけであり、「かしこい」選択とは言いがたいものであっただろう。にもかかわらず、「私は途中で投げだせなかった。なにかが私をつき動かした」という(日高 2011: 19)。日高の所見の提出は、臆病さや保身、悲観や楽観、もしくはシニカルさや計算といったものを越え出た“やけっぱちさ”のような「開かれた」勢いがある。そのような行動を自身がなしえた理由は、日高が「なにか」としか書きえないように、彼にとっても「謎」の要素である。

老年期の日高は、このような戦中の体験の「記憶」を、ポスト戦後社会に対して「つたえる」という「コミュニケーション」を通じて、その「記憶」の探求を深める作業にのめりこんでいく。1945年の「自分」は動くことができた。1960年の「社会」は動くことができなかった。その違いが考えられる必要がある。もしくは1945年の変革は、結局、1960年の変革には結びつかなかった。その理由が考えられる必要がある。そのためには「閉じていた」自分を行動に「開かせた」力を見出さなければならない。そして、その力の「体験」を人々に「つたえる」ために「考え」なければならない。

“皮肉屋だが臆病な自分を変えることはなぜ可能になったのか?”、このような思索は、いまいちど、日高が社会と時代に対してコミットしていくための方策を探るものであっただろう。それを探るべく、戦争に至る経緯とその後の時局の展開、愛国者の父とマルクス主義者の兄に囲まれた自分の思考の経緯などの「記憶」が思考の対象となっていく。自分をつき動かした「何か」は簡単に言語化できるようなものではなく、あいかわらず「謎」のままであるかもしれないが、それを「考え」、「つたえる」という「コミュニケーション」的行為の中で「深められ」、「開かれて」いく。「自己」の「謎」を「考える」と、「他者」に「体験」を「つたえる」ことは絡み合った作業としてあり、その相互の作業が連動する中で、それぞれが「深め」られていく。

ここには「媒介者」としての「自己」を希薄化し、水平的な接続を行うことを中心に「コミュニケーション実践」を行っていた過去の日高とは方向性の異なる、「自己」と「他者」の差異、「自己」と「他者」それぞれの「謎」を前提にした「コミュニケーション実践」の姿がある。日高六郎の学問的営為とは“新たな”「コミュニケーション」のあり方の模索にある、その中で日高自身の思考スタイルもさまざまに変化していった。ここに「コミュニケーション・クリティック」としての日高の思考実践を見ることができることだろう。

注

- 1) 日高自身も、「平和とか、人権とか、民主主義とかの思想あるいは価値」は「あまりに平凡な結論になるようですが、しかしときには平凡なことを平凡にいうこともはなはだ重要だと、わたしは考えています」と述べている(日高ほか 1967: 215)。
- 2) 日高が依拠する「市民」という語もまた、「最初から、閉鎖性と開放性、特殊性と普遍性とがまわっていた」ものであるとされている(日高 2011: 257)。
- 3) この点についてはリーディングス日本の社会学の『マス・コミュニケーション』の巻における竹内郁郎の概説を参照のこと。

- 4) 「座談会」という形式がそもそも日本に特殊な学術スタイルであるという指摘もある。雑誌「世界」の92年10月号で掲載された「文化の政治性」という記事では、アメリカの比較文化研究者たちがあえて「ZADANKAI」という形式をとりながら、日本の知識人たちの「非主体」的な在り様を論じている。
- 5) 『シンポジウム現代日本の思想 戦争と日本人』において、日高は戦中の日本の軍人の苦労にも「共感」の姿勢を見せて、周囲をいささか困惑させてもいる(日高ほか 1967: 129-131)など。
- 6) 日高と谷川からの関わりについて谷川の観点から考察された論文に、羅皓名「日高六郎と谷川雁の思想的繋がり」と「アンガージュマン」における差異(羅 2021)があり、両者の思想的関係について深く考察されている。
- 7) 谷川は「私を『工作者』にした人間をただ一人あげよといわれれば、私はちゅうちよすることなく日高六郎と答えます」という。日高は「私の意見なるものを全国にばらまき、私に恥じらいと怒りを感じさせ」た存在であり、その結果、「私はひそかに気ままに増殖してい」くことになったからである。日高の紹介によって、谷川の思想は誤解をも含むかたちで社会へと拡散していった。だからこそ、谷川は日高を「逆工作することを決意」したという(谷川 1963: 37)。このような経緯の中で、谷川の特異な日高論は展開される。
- 8) 日高は戦争終結直後から幾度も、この谷川の戦地からの手紙を引用している(日高 2011:13 など)。
- 9) 尾高邦男による日高評の中には「一見、……柔和で、實は激しい氣魄情と皮肉な舌鋒を秘めた」(尾高 1958: 15)性格であるという文面もある。
- 10) 山本昭宏『戦後民主主義』は、「戦後民主主義」のイメージの中から「平和主義」が消えていく歴史的過程を描き出したものとして読むことができる書物だろう。
- 11) 海軍技研では「軍機関以外の場所では考えられないような、栄養に満ちた西洋料理(!)」(日高 2005: 144)が出たこともあったという。すでに技研に属していた東大の先輩である清水幾太郎の「冗談めかして」発せられる「賢答」を耳にしながらも(日高 2005: 143)、日高はそこで自分の意見を表に出すことを躊躇っていたという、
- 12) 実際、日高はこのすぐ後に嘱託を解任されているが、それ以上の危険に対しては「敗戦への足どりのほうが早かった」ために助かったと日高は語っている(日高 2011: 20)。

参考文献

福武直・日高六郎, 1952, 『社会学 社会と文化の基礎理論』光文社。

日高六郎, 1944, 「集団の封鎖性と開放性について」『社会学研究』1: 273-300。

———, 1953, 「日本的知性の非生産性 思想は民衆から生命を得る」『改造』34(12): 112-117。

———, 1955a, 「あとがき」相良寿次・杉靖三郎・波多野完治・日高六郎・南博・宮城音弥編『現代心理学6 政治と経済の心理学』河出書房, 315-318。

———, 1955b, 「マス・コミュニケーション概論」清水幾太郎編『マス・コミュニケーション講座1 マス・コミュニケーションの原理』河出書房, 7-66。

———, 1960a, 『現代イデオロギー』勁草書房。

———, 1967, 「コミュニケーションとはなにか」編日高六郎・佐藤毅・稲葉三千男編『マス・コミュニケーション入門』有斐閣, 1-9。

———, 1970, 『日高六郎教育論集』一ツ橋書房。

- , 1973, 『人間の復権と解放』一ツ橋書房.
- , 1974, 『戦後思想と歴史の体験』勁草書房.
- , 1980, 『戦後思想を考える』岩波書店.
- , 1995, 『私の平和論 ——戦前から戦後へ——』岩波書店.
- , 2005, 『戦争の中で考えたこと ある家族の物語』筑摩書房.
- , 2010, 『私の憲法体験』筑摩書房.
- , 2011, 『日高六郎セレクション』岩波書店.
- 日高六郎編, 1960b, 『1960年5月19日』岩波書店.
- 日高六郎ほか(上山春平・作田啓一・多田道太郎・鶴見俊輔・橋川文三・安田武・山田宗睦), 1967, 『シンポジウム現代日本の思想 戦争と日本人』三省堂.
- 日高六郎・加藤秀俊, 1962, 『現代アメリカの思想』概説 桑原武夫・伊藤整・松浪信三郎・日高六郎編『世界思想教養全集 15 現代アメリカの思想』河出書房新社.
- 平川千宏, 2004, 「日高六郎著作目録」『参考書誌研究』61: 8-107.
- 北河賢三, 2018, 「日高六郎の戦争・戦後体験と戦後思想」『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』66: 135-152.
- 黒川創, 2012, 『日高六郎・95歳のポルトレ 対話をとおして』新宿書房.
- 見田宗介, 2018, 「追悼・日高六郎——「含羞の知識人」を見送る」『世界』911: 233-234.
- 宮下祥子, 2020, 「日高六郎の学校教育をめぐる思想と運動」北河賢三・黒川みどり『戦中・戦後の経験と戦後思想 一九三〇—一九六〇年代』現代史料出版, 183-204.
- 中筋直哉, 2003, 「社会運動の戦後的位相」矢澤修二郎編『講座社会学 15 社会運動』東京大学出版会, 27-56.
- 尾高邦雄, 1958, 「福武・日高・高橋君のプロフィール」『書斎の窓』56: 15-17.
- 羅皓名, 2021, 「日高六郎と谷川雁の思想的繋がり」と「アンガージュマン」における差異」『教養デザイン研究論集』19: 1-21.
- 作田啓一, 1967, 『恥の文化再考』筑摩書房.
- 清水幾太郎, 1955, 「編者のことば」清水幾太郎編『マス・コミュニケーション講座1 マス・コミュニケーションの原理』河出書房, 1-2.
- 竹内郁郎, 1987, 「概説 日本の社会学 マス・コミュニケーション」竹内郁郎・岡田直之・小島和人編『リーディングス日本の社会学 20 マス・コミュニケーション』東京大学出版会, 3-7.
- 谷川雁, 1963, 『工作者宣言』現代思潮社.
- 鶴見俊輔, 1975, 「ルソーのコミュニケーション論」『鶴見俊輔著作集 第1巻 哲学』筑摩書房, 391-419.
- 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二, 2004, 『戦争が遺したもの 鶴見俊輔に戦後世代が聞く』新曜社.
- 宇野重規編, 2016, 『リーディングス戦後日本の思想水脈 3 民主主義と市民社会』岩波書店.
- 山本昭宏, 2021, 『戦後民主主義 現代日本を創った思想と文化』中央公論新社.